

兵庫県三田に生まれた川本幸民と 化学新書

SAKANOUÉ Masanobu

阪上正信

金沢大学名誉教授 理学博士



カット：川本幸民

わが国で「^{せいみ}舎密」に代わり始めて「化学」の語を使い、内容も宇田川榕庵の『舎密開宗』に比し、原子（^{あとうむ}亜多面）の説をもとに、等量（^{えきゆい}越九乙華連天，^{えきゆじゆう}越九重）によって、化合物（抱合物）・化学反応を定量的に説明し、化学式も示し、その構造を図式化するなど、より近代的な西欧化学による手書きの稿本『化学新書』和装3冊（1861年、日本学士院所蔵）の著者は川本幸民である。

幸民は1810年（文化7年）摂津国三田藩九鬼隆国（3万6千石）の城下町に生まれた。その出生地、現在の兵庫県三田市三田町24-29（当時の足軽町）には三田市歴史の散歩道の標識⑧が建てられている。足軽町といっても代々三田藩医の川本家の居宅がたまたまここに在ったことは、三田小学校に写しのある三田古地図に〔現在は戦後建設のバイパス道が、西方寺の西側にあることに注意〕、祖父の川本周伯の名と家紋の記入のあることから確認できる。幸民の父周安は、加東郡横谷村〔現東条町横谷〕の医家山中家から周伯の養子として来た人で、幸民は7人の姉兄の末子三男である。幼名は敬藏、後に周民、通称は養徳で、長じてからは名を裕とし、字は幸民、裕軒と号し、書齋の名の静修堂も著書には用いている。

10歳にして父を亡くし、その後は長兄周篤が養護した。この歳、藩校造士館に入り漢書を学び、夜も長老のもとで素読を習うなど勉学に励み、成績もよく頭角をあらわす。この藩校は、幸民入学の前年、好学の藩主隆国が、それまでは城



写真：史跡三田城跡碑（三田小学校校門隣）のもとにある、裕軒川本幸民先生顕彰碑。

内〔現有馬高校の地、現三田小学校の地は九鬼家陣屋〕にあった藩校国光館を拡充のため、桜の馬場西詰左側の屋敷〔現三田市屋敷町6の地、前述古地図では藤四郎の名〕に開設したものである。

18歳になった1月、漢方医学を学ぶため、幸民は加東郡^{こなし}木梨村〔現在木梨神社のある兵庫県社町藤田、兵庫教育大の西北方、同附属中の北方〕の村上（字野）良八に入門した。同家は和漢医学書を多数所蔵する近郷の名家で、幸民はこれらを熱心に涉獵した。1年余の後の4月に三田に帰ったが、その5月、つとに洋学が将来重要となることを洞察していた藩主隆国が、藩校での成績抜群の幸民を藩命により特に抜擢し、学資も与えられ、藩主に従い兄周篤が江戸に勤番するのと同行、江戸に留学、20歳の6月に到着した。

江戸に着いた翌月、兄周篤が俄な病で死亡するという不幸・悲嘆に見舞われた。しかし家継承の

勧めも固辞し、藩主からの恩遇を思いオランダ医学を学ぶため江戸に留った。まず足立長 雋^{あだちちようしゆん}に入門し、翌年、その英才を認めた師に伴われて、蘭方医として名声高く、36歳とより若く、蘭学塾も起こし子弟を教えていた坪井信道の門に入った。此处には緒方洪庵も半年後に入門し、共にオランダ文典の翻訳にも刻苦精励する。ただ幸民は生来酒好きで「幸民いよいよ酔えばいよいよ勤む、吾徒ついに及ばず」と洪庵の嘆息もある。

坪井塾での2年半近くの修学の後、1833年三田に一時帰省、京阪を遊歴して折り返し江戸に戻った。翌年7月藩主の参勤交代に従い三田に帰り、12月には藩医に列せられ、江戸居住を認められたので、その翌年1835年(天保6年)5月藩主とともに上京した。幸民26歳の時で、医業も開業、生活も安定したので、同年12月蘭医の媒酌で水戸の藩医で西学都講であった青地林宗の三女秀子と結婚した(林宗の長女糸子は坪井信道夫人)。後に岳父林宗のわが国最初の物理学書とされる『気海観瀾』を、幸民は大いに増補し、有名な『気海観瀾広義』15巻5冊(1851-56年)を著している。

新婚後間もない天保7年2月、乱酔のため身分のある人への刃傷事件をおこし、藩邸に幽閉、その後6年間相州浦賀に蟄居生活を送ったが、この試練の間も勉学を深め、32歳の天保12年、江戸に帰ることが許された。この年幸民をひきたてた隆国は引退したが、新藩主隆徳と幸民はそりが合わず、隆国には深く恩義を感じてその隠居宅近くに居を移し、君臣水魚の交わりをした。

この頃から幸民は、薩摩藩の島津斉彬の知遇もえて、しばしばその江戸屋敷に伺い、西欧の兵制軍備関連の蘭書の訳述をしている。稿本『兵家須読舎密真源』9冊(1856年)は、斉彬の願いによる火薬の化学にも関する訳書であり、『遠西奇器述』2冊(1854年、第二輯1856年)は薩摩藩での口述をもとにしている。なお造船所設置にさいし顧問に幸民を招いたとの記述もあるが、鹿児

島には実際に赴いたかは確証無く、疑問点である。

ともかく1852年隆国が没して希望を失っていた幸民は、斉彬の三田藩への懇願により1854年薩摩藩に入籍した。しかし、斉彬も同年7月没した。

幸民は種々の蘭書を翻訳するのみでなく、それによる知識をもとに、実地にマッチ、写真、ビールなどについて製作試験をしている。写真は1851年銀板法で自ら成功したと伝えられ、いま日本学士院には、1861年自分と夫人をそれぞれ撮影した写真が所蔵されている。なおカットの写真は、横浜の下岡蓮杖撮影によるより晩年の姿である。

幕府が洋学所を新たに蕃書調所とした1856年(安政3年)47歳の時、その教授手伝いに任命され、3年後には教授職となり、1860年には設置の精練方(後の化学方)も担当した。ここで教科書にもなったのが『化学新書』で、ドイツ・ステックハルトの原著をオランダ・ギュニングが蘭訳し、それを幸民が重訳したものである。それには自ら実施できる多数の実験項目(試)を含み、教育的にも意義深く、現在化学史学会では、日本学士院の了解もえて復刻し、解説や幸民等についての諸文献資料も含めての出版を計画中である。

蕃書調所は、1862年洋書調所、翌年に開成所と改称、維新後の東京大学の前身となった。幸民は幕府がなくなった明治元年7月、病として官を辞して三田に帰った。そして三田屋敷町内の金心寺〔現在の天神三の位置には明治2年に移転〕に寓して英蘭の塾を開いた。入門者が多く近くの畑中村の方仙寺(現南が丘の大歳神社の近く)にも分校を開いた。嗣子清一の任官に伴って明治3年7月塾を閉じて上京し、その翌年1871年6月、病により62歳(いずれも数え歳)で死去した。

文 献

- 1) 芝 哲夫, 化学と工業, 29, 457(1976).
- 2) 阪上正信, 化学と工業, 44, 2093(1991).

[連絡先] 665 宝塚市宮の町14-20 (自宅)。